

The Curious Case of Benjamin Button の原作と その映画化作品における象徴技法について

山中 祐子

(受付 2012年3月21日)

はじめに

名作小説に対して、後に映画化したものでは原作を超えることは難しいと考えられる。その理由は、小説は文章の長さに制約がなく、また読み終えるのに何日かけても良く、時間的制約が無いからである。それに比べて映画は、興行上の理由から制約があり、長編小説を映画にする場合は、原作のかなりの部分が割愛され内容が単純化されることが多い。この問題は映画界で不朽の名作と言われる「風と共に去りぬ」に対する原作との比較でも言われていることである。また、小説では読者の想像力の及ぶ限り、ファンタジーから空想科学の世界までを自由に描いて表現できるが、映画では対象物を実際に製作して撮影しなくてはならないという、映像化する上で技術的制約がある。この点、最近ではコンピュータグラフィックスの発展により自由度が増しているが、それでも小説のような荒唐無稽な世界を自由に創出できるまでには至っていない。

多くの映画が原作を越えられないのは上記の理由によるが、フィッツジェラルドの *The Curious Case of Benjamin Button* (1922年) においては逆転現象が起きている。原作は1922年に短編集の中で公開されたが評判は芳しくなかった。この原作が評価されなかった理由は、原作の内容が空虚な人生物語に終始していたからであり、フィッツジェラルド小説の主要な読者である富裕層の娯楽作品として売れる要素に欠けていたからではないだろうか。富裕層は *The Great Gatsby* (1925年) に見られるように、野心と才能に溢れる主人公が、アメリカン・ドリームを追い求めて大成功を収め、妖艶で才気に溢れた美女に囲まれて愛憎劇を繰り広げるといふ、自分達と似た境遇のストーリーを楽しみたい人が多かったからだと思われる。

しかしながら映画の、*The Curious Case of Benjamin Button* (邦題：「ベンジャミン・バトン数奇な人生」, 2008年公開) は大ヒットした。ヒットしただけでなくアカデミー賞・ゴールデングローブ賞に輝くなど数多の賞賛を勝ち取る名作に名を連ねた。

この論文では、なぜ映画「ベンジャミン・バトン数奇な人生」が大ヒットしたのか、原作には何が足りなかったのかを考察したい。

I 原作と映画の違いの概要

なぜ「ベンジャミン・バトン数奇な人生」の原作はヒットせず、映画は成功したのだろうか。

その理由は、原作では奇抜な着想によるたぐい稀な世界を描き出すのには成功しているものの、読者に感動をもって受け止められる表現までには仕上げられていないからである。奇抜な着想の根底に流れる深い意味、すなわち逆転する時間を生きる人生の主題を、十分咀嚼しないまま問題提起するに留まっていることにある。それが文芸作品としての完成度が低いと言われる所以である。

映画化に際しても、1990年代には監督がスピルバーグで主演がトム・クルーズ、1998年には監督がロン・ハワードで主演がジョン・トラボルタ、更には監督としてスパイク・ジョーンズでの映画化が繰り返し企画されたが、いずれも頓挫した。頓挫した主な理由は、原作をそのまま映画化しただけでは集客能力に欠け、興行成績を採算ベースに乗せられないと考えられたのであろう。

しかし、今回デビッド・フィンチャー監督と脚本家等は過去の失敗を踏まえて、原作の弱点を克服するために構想を何度も練り直す試行錯誤を繰り返した末、新しく生まれ変わったドラマに仕上げた。その結果、封切られた映画は、逆転する時間を生きる人生の奇抜さと、その人生がはらむ本質的な主題を正面から捉え、それを乗り越えて生きるための示唆を数多くの巧みな象徴技法を駆使して見事に表現し、観客を感動の渦に引きこむことに成功したのである。

成功をもたらした要因の一つは、基本的な主題を変えることなく、メインストーリーを空虚なものから愛と感動のドラマに変換したことにある。加えて、原作では逆転する時間を生きる人生の重い主題に押しつぶされて空虚な一生に終わっていた物語を、映画では過酷な運命に翻弄されながらも苦難を乗り越えて真実の愛に生きる男性の物語に仕上げているからだと考えられる。

それは、数奇な宿命を背負わされた男性が、それでもなお健気に生きる人生の意味や価値を、巧みな象徴技法を駆使することによって、映画では多くの人々が容易に理解できるレベルまでに熟成して表現しているからではないだろうか。

では、今回の映画化では原作のどの点をどのように修正して成功したのかについて以下で具体的に考察する。

II 空虚世界から感動世界への転換

フィッツジェラルドの書く小説は、悲劇に終わるものが多いが、結末は悲劇であろうとも中身が充実していれば、読者は、そこから多くの事や示唆を感じ、何かを習得し、ある種の充実感を得られる。しかしながら、「ベンジャミン・バトン数奇な人生」では、心に熱く残るもの、心に重く残るものが見当たらない。その理由は数奇な人生を生きる男の物語ではあるが、その数奇な人生が何を意味し、我々に何を訴えようとしているのかが明確に伝わってこないからである。伝わらない理由は、老人として生まれたベンジャミンの心の葛藤や悲しみがほとんど語られていないこと、そして当然ベンジャミンを一番愛したであろう母親との心のつながり、母親の嘆きなどが語られていないからである。老人として生まれた赤ん坊と、悲しい運命を一緒に背負って生きるであろう母親の世界とが描かれていれば、この物語は始めから読者に悲しみの共感を呼び起こすことができたのではないだろうか。

また、妻となるヒルデガルドとの出会いと愛も、単に若い美女が好みの男性が、年配男性が好みの女性に一目惚れする物語が書かれているだけで、二人がどんなに相手を理解し、自分達の運命の中で相手を愛していこうとしたかが描かれていない。境遇の異なる二人の逆境を乗り越えていく真剣な愛が書かれていたなら、ベンジャミンの人生にも愛の世界を体験する喜びと充実感があったと思えるのだが、肝心の二人の愛の中身については全く書かれていない。

加えて、そんな夫婦にも子供が生まれ、夫婦の生きる意味や夢を子供に託して育てたのなら、こんな空虚な関係にはならなかったであろう。

原作を読んで数奇な人生を疑似体験する読者にとっては、人生が数奇であればあるほど、感じられる喜びや悲しみが多いはずである。しかし、この原作を読み終えても、胸を打つ愛もなければハラハラするサスペンスもなく、ただ淡々とストーリーが語られて終わるだけなので心に何も残らない。要するに、親子、特に不憫な子を持つ母親の心と、それを頼りに生きる子供との愛の姿が描かれておらず、さらには夫婦の間にも愛と呼べるものが何も描かれていないために、このドラマには真実味も感動もなく空虚さのみが漂うのである。原作の中に読者は、時間を逆に生きる人生から見たら初めて見えてくる人生の死角にあるもの、換言すれば、普通の時間を生きている人間には見えなかった人生の意味や価値を見つけることを期待しているのだが、その期待には応えてくれない。

一方映画ではストーリー展開上の工夫が見られる。母親はベンジャミンを出産すると同時に死亡し、主人公の境遇を大きく変えてしまう。一人残された夫は、わが子が老人の姿で生まれたことに耐え切れず、老人ホームの前に置き去りにしてしまう。しかし幸いなことに

老人ホームを経営する愛情深い黒人女性に拾われて、わが子として育てられ、また、妻になるデイジーとも時間をかけてお互いの人生の挫折や苦痛を理解しあいながら愛情を育み、更にはかつて自分を捨てた父親とも出会って和解し、豊かな人間関係に包まれた人生を築いていくストーリーに組み立てられている。しかし夫婦の片方だけが逆転する時間を生きれば家族の崩壊は時間の問題となってくる。次第に追い詰められていくベンジャミンの苦悩がストーリーの進展と共に明白となり、悲劇的結末が暗示されることになる。そして最後に赤ん坊になったベンジャミンは年老いた妻デイジーに抱かれて永遠の眠りにつく。観客は愛に溢れた家族の、愛すればこそその別れの切なさに胸を痛める。

このストーリーでは、主人公がいかに愛に満ちた世界を手に入れることができたとしても、逆転する時間を生きるという運命を背負って生きる時は、手に入れたもの全てを失うという未来が待ち受けていることを明らかにしている。この逆転する人生から見えてくるものは、凡庸に時間をつぶして生きている我々に、生きる意味や価値は何なのかを問い求めているのである。

Ⅲ 非現実性の修正

老人で生まれ、赤ん坊になって死ぬというストーリーは奇抜であるがゆえに、読者や観客が違和感を持つのは避けがたい。映画では、この違和感を和らげ、訴えたい本来のテーマを観客に理解してもらうために、ストーリーの非現実性に修正を加えて観客の注意を本来のテーマに集中させることに成功している。

原作に見られた非現実性を映画ではどのように修正しているのかについて具体的に見てみる。まず、原作を読んだ読者が最初を感じる違和感がベンジャミンの誕生場面である。原作では生まれてすぐの子供の足がベッドからはみ出す様子が書かれているが、大人サイズの子供が母親の胎内から生まれるという話は、物理的に不可能なことであり、読者の感覚には受け入れ難いものだといえる。さらに生まれたばかりであるのに父親と会話できる能力を持っているのも非現実的であり、受け入れられないものである。

この点について映画は、生まれてきた子供のサイズは赤ん坊で、顔や皮膚などの外見や内臓などが老人で、会話はできなくて赤ん坊として泣き笑うことしかできないという設定になっており、観客に違和感なく受け止められるものになっている。

次に、原作ではベンジャミンは両親のもと、実家で育てられる話になっており、そのため父親を始めとする家族関係がうまく成立できないことに多くのページが割かれている。また最も関係の深い母親が一度も登場せず強い違和感が残る。これに対し映画では、前述のように出産直後に母親は死に、父親には置き去りにされるのだが、老人ホームを経営する黒人女

性に拾われて愛情深く育てられる話しに修正されており、育ての親と親密な親子関係を保ちながら、ホームに同居する外見上同年輩に見える老人達と交流しながら、「愛情」や「社会性」を学び成長するというストーリーに変更されている。

これらの修正により、観客が受け入れがたい違和感を覚える点が少なくなっている。

しかしながら、ストーリーの空虚さを取り去り、非現実性を修正しただけでは、弱点がカバーされただけに過ぎず、まだ映画界の賞賛と脚光を浴びるレベルに達したことはない。

この原作が映画として世界的にヒットした真因は他にあるのである。それは次に述べるように物語の核心をなすテーマを、象徴技法を巧み駆使して誰にも解るように表現出来ているからだと考えられる。

IV 核心テーマの象徴技法

IV-1 象徴技法とは何か

以下で象徴技法の説明に入る前に、本論文における用語の定義を明確にしておきたい。

「象徴」とは文字通り、表現したいものの意味やイメージを特徴的に伝える表現対象や表現内容の代用物であり、「象徴表現」とは、その象徴を用いて表現すること、「象徴技法」とは、象徴の選択方法や、象徴表現する際の構成技術、と定義する。

象徴技法とは何か、については諸説あるが、代表的なものとして『象徴表現とはなにか』（ダン・スペルベル；菅野盾樹訳—紀伊國屋書店、1979年¹⁾）における「象徴技法（表現）」とは、知識の構成と記憶の機能に力を貸す自立した装置」とする説が有名である。この説を簡略に説明すると、象徴技法とは、人間が持って生まれた本能や、伝承してきた文化や知識などを融合した総合的な理解力や想像能力を、読書や映画鑑賞などの外的刺激で呼び覚まし、心の中で情景を即興再生して、不安や希望の感情を擬似体験することを意図した表現手法と定義されている。

その観点から「ベンジャミン・バトン数奇な人生」の原作と映画を比較すると、原作は込められた主題の本質を正面から捉えることを避け、未消化のままストーリーを終えているのに対して、映画では込められた主題を正面から捉え、十分に咀嚼し、象徴技法を巧みに駆使することにより観客の心情に解り易く溶け込むように表現されていると言える。

1) 『象徴表現とはなにか』ダン・スペルベル著 菅野盾樹訳 紀伊國屋書店、1979年

IV-2 原作と映画における象徴技法の比較

IV-2-1 原作における象徴技法

原作には象徴技法が使用されている箇所は少ないが、敢えて挙げると以下のものがみられる。

(1) 誕生場面で階段を転げ落ちる洗面器

Clank! The basin clattered to the floor and rolled in the direction of the stairs.

Clank! Clank! It began a methodical descent as if sharing in the general terror which this gentleman provoked.

“I want to see my child!” Mr. Button almost shrieked. He was on the verge of collapse.

Clank! The basin had reached the first floor. (pp. 5-6)²⁾

これは父親が生まれたばかりのベンジャミンを病院に迎えに行ったとき、病院の階段を下の階まで転げ落ちる洗面器を描写したものである。しかし読者には、この表現は単なる情景描写にすぎないと思われ、音を立てて転げ落ちる洗面器が生まれたばかりのベンジャミンの将来を暗示するものだと想像できない。

(2) 愛の始まる舞踏会の夜

ベンジャミンと未来の妻ヒルデガルドとの出会いの場面でも象徴技法が使われている。

It was a gorgeous evening. A full moon drenched the road to the lusterless color of platinum, and late-blooming harvest flowers breathed into the motionless air aromas that were like low, half-heard laughter. The open country, carpeted for rods around with bright wheat, was translucent as in the day. It was almost impossible not to be affected by the sheer beauty of the sky—almost. (pp. 25-26)³⁾

ここでは、これから繰り返される出会いと愛の始まりを予感させる象徴として

“a gorgeous evening” “A full moon drenched the road to the lusterless color of platinum” “carpeted for rods around with bright wheat” 等の表現がふんだんに使われており、最後には

2) F. Scott Fitzgerald, *The Curious Case of Benjamin Button* (Scribner, 2007)

3) *Ibid.*,

“It was almost impossible not to be affected by the sheer beauty of the sky—almost” と初めて恋の世界を体験して胸がときめくベンジャミンの心境を最大級に表現している。

しかし、二人の未来を象徴技法で表すのであれば、胸のときめく恋の世界だけでなく、逆転する時間を生きる主人公の未来に待ち受けている暗黒の世界も表現されていなくてはならない。仮に、未来に待ち伏せしている暗黒を予感させる表現がなされていたなら、読者は恋への期待だけでなく、未来への大きな不安を持ちながら物語に引き込まれていったのではないかと思われる。

(3) 舞踏会が終わって

“... And what do you think should merit our biggest attention after hammers and nails?”
The elder Button was saying.

“Love,” replied Benjamin absent-mindedly.

“Lugs?” exclaimed Roger Button, “Why, I’ve just covered the question of lugs.”

Benjamin regarded him with dazed eyes just as the eastern sky was suddenly cracked with light, and an oriole yawned piercingly in the quickening trees... (p. 30)⁴⁾

ここではヒルデガルドに恋焦がれて、気もそぞろになっているベンジャミンの心境をうまく表現できている。

しかし、その恋の向こうに待ち受けている暗黒の世界を暗示する象徴技法が用いられていたなら、読者は恋に溺れた心情の背後に隠れて忍び寄る不幸の足音を聞くことができたことだろう。

(4) 社交界の花形になったベンジャミンが50歳近くなった妻に対して

There was only one fly in the delicious ointment. (p. 39)⁵⁾

と述べているが、ベンジャミンは若く生氣溢れる自分の世界を“the delicious ointment”に例え、そこにいる妻が“the delicious ointment”に落ちた“fly”のように薄汚く感じられたと表現されている。若さに溢れるベンジャミンが、年齢を重ねていくヒルデガルドに感じる心情を端的に表現しており、この原作の中では秀逸な象徴技法と言える。

4) Ibid.,

5) Ibid.,

しかし、これまでに述べてきた原作における象徴技法は、いずれもストーリーの一場面を表現するものに留まり、フィッツジェラルドがこの原作の主題として何を表現したかったのか、その観点からの象徴技法の活用がなされていない。極論するなら、フィッツジェラルドはこの原作で表現すべきテーマを明確に自覚していないために、的確な象徴技法を活用することなく、単に、時間を逆さに生きる男の物語を書いたに留まったのではないだろうか。

彼の代表作 *The Great Gatsby* の中に見られる代表的な象徴技法の適用例を探してみよう。

一つは、主人公ギャツビーが故郷 West Egg から大都会の New York に行くには通らなくてはならない谷 ash heaps のある a valley of ashes に関する表現である。この通らなくてはならない灰の谷とは、すなわち貧乏な田舎者のギャツビーがアメリカン・ドリームを手に入れるために通らなくてはならなかった裏社会を暗示しており、ギャツビーが生きてきた暗部を見事に象徴している。

二つは the green light に関する表現である。これはギャツビーの夢を象徴しており、この夢はギャツビーの経済的成功と、そこからかつての恋人 Daisy をもう一度手に入れようとするギャツビーの宿願を意味し、それがギャツビーの the green light として象徴表現されているのである。しかし、そんなギャツビーは夢を果たせぬまま殺されて、a valley of ashes の灰となってしまう。

すなわち *The Great Gatsby* においてはアメリカン・ドリームを目指す野心溢れた貧乏な青年が通らなければならなかった暗闇と、いずれ訪れる破綻とが、見事な象徴技法を駆使して表現されており、読む人の心に想像を沸き立たせてくれる。

一方、「ベンジャミン・バトン数奇な人生」に関して、フィッツジェラルドは、Ober 氏に次のような手紙を出している。

Dear Mr. Ober:

Under a separate cover I enclose a short story *which I began a long time ago and decided to take two days off to finish up. It is weird thing and I suppose the Metropolitan would be most likely to take it—but I really feel that unless they pay faster I never want to sign another contract with them.

脚注 * “The Curious Case of Benjamin Button” (p. 33)⁶⁾

以上からこの短編は、フィッツジェラルドが十分な時間をかけて書き上げたものではなく、当時放蕩生活をしていた彼や妻ゼルダの遊興費捻出のため等に拙速に出版されたものではな

6) Brucoli and Atkinson. *As Ever, Scott Fitz-* (J. B. Lippincott Company, 1972)

いかと推察される。

IV-2-2 映画における象徴技法

一方、映画には主題の核心を表現する象徴技法が幾重にも組み込まれている。その中の代表的な象徴技法を六つ取り上げ、それが何を象徴しているかについて考察する。

(1) 逆に回る時計

原作においても映画においても主題は人生における時間というものの意味を問うことにあ
る。そのために映画では導入部で時計を取り上げている。

And we see the distinctive figure of Theodore Roosevelt, in overcoat and hat, the war heavy on his shoulders. We watch Mr. Cake, with the aid of an assistant, climbing the scaffolding to his clock covered by a velvet drape...He stands for a moment...and with a simple tug, releases the purple swath...People gasp at the magnificent clock...“Mr. Cake” winds the clock, which chimes a glorious chime...

Pushed by an angel, the second-hand begins its eternal journey...going around...

Everyone cheers...until they realize the clock is going the wrong way...traveling backwards in time...A man shouts, “It’s running backwards!” (p. 12)⁷⁾

特に、時間を逆に回すことの意味を強調するために、戦争で息子を失った盲目の時計職人を登場させ、「時を戻せば戦死した若者が戻ってくる」と言って、時間を逆に刻む時計を作り、それをルーズベルト大統領出席の式典でニューオリンズ駅に装着する。逆転する時計と共に戦死した彼の息子が戦場で生き返って走る姿を映し出すことで、時間を逆転させたい親達の願いが表現されている。この象徴表現によって観客は、自分の中にある過去の記憶に引き込まれる。特に戦争で息子や兄弟を失った人々は、もし時間が逆転したならば今はいない家族と再会できるかもしれないという幻想に引き込まれるのである。映画の中で逆に回る時計は、時間が逆転することの幻想性を象徴的に表現するだけでなく、逆転する時間を生きる運命の過酷さを次第に現実のものにしていく。

We see the new clock, a digital clock, high on the terminal wall running the right way...going forward...and as the clock turns...people hurrying to their destinations, living

7) Eric Roth, *The Curious Case of Benjamin Button Story to Screenplay* (Scribner, 2008)

their lives... (p. 286)⁸⁾

そしてその時計は2002年、時代が過ぎていくことを象徴するかのように壁から静かに降ろされてデジタル時計に置き換えられ、倉庫の片隅に片付けられる。

(2) ハリケーン

この映画は、ハリケーン・カトリーナの襲来が切迫した時間の中で語られる物語になっている。そしてハリケーンに病院や街が襲われる中で、語り手である妻デイジーは娘に看取られながら静かに息を引き取る。

このハリケーンは何を象徴しているのでしょうか。これには二つの意味が込められていると思える。一つは、人間が抗うことの出来ない天災を背景にストーリーを展開することにより、人生にはいつどんな悲劇的な運命が待ち受けているか判らないということを表しており、もう一つは、デイジーの命脈が尽きようとしていることを暗示している。そのことを迫り来るハリケーンに重ね合わせて巧みに表現しているのである。

これらの象徴技法により、人は誰も与えられた運命を受け入れて、限られた時間内で精一杯生きなくてはならない存在であることが表現されている。そして最後にハリケーンのもたらした洪水が、このドラマのテーマである倉庫に眠る時計に押し寄せるシーンで終わることも生きていられる時間が刻々と少なくなっていることを暗示している。

(3) カミナリ

老人ホームで、カミナリに何度も打たれた老人が登場する。彼は幾度となく突然カミナリに打たれて瀕死の重傷を負うが、その都度再起してこれまで生き延びてきた。そして彼は過去を振り返って次のように言う。

“Blinded in one eye...I can't hardly hear. I get twitches and shakes out of nowhere... always losing my line of thought...but you know what...God keeps reminding me I'm lucky to be alive.” (p. 171)⁹⁾

これは何を象徴表現しているのでしょうか。人生とは思いがけない危機に何度も遭遇するものであり、その危機を乗り越えたならば、生かされていることへの感謝とその幸せの世界が見えてくる……ということを示唆している。人は死に直面するような過酷な試練を受けて

8) Ibid.,

9) Ibid.,

初めて、生きることの真の意味や価値を感じられるようになるということを示唆していると考えられる。

ベンジャミンが直面した人生の大きな危機や試練は四回ある。

最初の危機は、生まれた直後に父親によって運河に捨てられそうになったことである。この時は幸い港湾を警備していた警官に見つかって難を逃れ、代わりに老人ホームの前に置き去りにされる。

二回目は、老人ホームで知り合った黒人の友人に誘われて街に外出した際に、身勝手な友人によって街路に一人取り残されたことである。ベンジャミンは電車の乗り方も知らないので、トボトボと長い道のりを歩いて帰る羽目になり、夜になってようやくホームに辿り着いたものの心配した母親にこっぴどく叱られる。しかしここで彼は、今日の出来事は自分にとっての自立への第一歩の記念日で「人生最高の日」なのだと、試練に出会ったことに対して前向きな自覚をする。

三回目は戦争場面である。第二次大戦の最中に、彼は船舶の修理や物資の運搬を引き受けた船に乗り込み太平洋に乗り出す。そこで日本軍の潜水艦に急襲された味方貨物船と遭遇し、自分達も砲弾が入り混じる中で戦う。この戦火の中で、これまで父親代わりをしてくれた船長や同僚の死を経験するが、彼は九死に一生を得て帰国する。

そして最後の四回目の危機は、結婚して娘が生まれ、成長していくのを見守る中で、逆に自分がどんどん若返って、いずれは子供から赤ん坊になってしまい、愛する娘の父親の役割をなし続けることができなくなるという宿命に直面したことである。ベンジャミンも妻も結婚する前からその日がくることは判っていた。

それでも二人は愛し合い結ばれて生きることを選んだのである。しかしベンジャミンは避けられない自分の運命に対して、下述のピアノを習った老婦人の教えの通り、愛するものを守ることに責任を取ること、そのことの中に自分が生きた最大の意味があることを確信し、「娘には普通に年取る父親が必要だ」と言い残して家族の元を去る。

(4) ピアノを習った老婦人の言葉

BENJAMIN: What if I was to tell you I wasn't getting older—I was getting younger than everybody else...

THE WOMAN: Well, I'd feel very sorry for you... to have to see everybody you love, die before you. That would be an awful responsibility...

BENJAMIN BUTTON: I had never thought about life or death that way before...

THE WOMAN: Benjamin... We're meant to lose the people we love. How else would we

know how important they are to us. (p. 92)¹⁰⁾

ベンジャミンはここで老婦人から、だんだん若返る人生においては、避けられない試練が将来待ち受けていることを予言されている。そしてその試練に対処する際大きな責任を担うことになることも予言されている。人が愛することの核心を知るのは、愛する人を失う時であり、その時が訪れた時、ベンジャミンは愛する者達への責任をどう担うのかが問われるのだと教えられる。

これは、時間を逆に生きるベンジャミンには生きる上での強い人生観を持つことが必要であることを示している。ベンジャミンはこの教えを守り、自分の過酷な運命の元で家族を愛することの責任を全うする道を考え出し実行する。この教えは主人公ベンジャミンだけではなく、それぞれの道を生きている観客の胸に響く。

(5) ハチドリ

ハチドリの話が挿入されている。これが象徴しているものは何なのか。

CAPT. MIKE: The humming bird is not just another bird! Its heart rate's twelve hundred beats a minute...! Its wings beats eighty times a second...! If you was to stop their wings from beatin, they would be dead in less than ten seconds ...This is no ordinary bird, this is a frikkin' miracle! (p. 112)

CAPT. MIKE: Do you know what the figure eight is the mathematical symbol for...?! Infinity! (p. 113)¹¹⁾

船長は、ハチドリの羽の動きが描く数字の 8 の字は無限大を現し、これは「奇跡の鳥」の象徴であると力説する。ハチドリの意味するものは絶え間なく繰り返られる命の営みの永遠性であり、魂の永遠性である。ベンジャミンは、このハチドリが、戦死した船長の船から船長の魂を運ぶように天に向かって舞い上がっていくのを見送る。ハチドリは命の永続性を運ぶ神の僕として描かれている。映画の末尾で妻デイジーが死に直面したときにも、窓の外にハチドリが現れデイジーの魂を迎えに来るのである。

無限大や永遠性を象徴するハチドリが、船長の死の場面とデイジーの死の場面で登場するのは、人間の魂は無限に永遠に生きていくことを象徴していると思われる。映画では、時間の有限性を生きる人間と、その中で永遠性を求める魂の両者をつき合わせて描くことで、「時

10) Ibid.,

11) Ibid.,

間」の不思議さが表現されている。ベンジャミンの命は子供へと繋がり、次代へと継承されていくことの中に永遠性があることを示している。

(6) ドーバー海峡を泳いで渡る女性

ベンジャミンがホテルで恋をして深い関係になったスパイの妻は

“You make me feel years younger too. I wish I was. So many things I would change. I would undo all of my mistakes. ... I kept waiting, you know, thinking that I'd do something to change my circumstances...Do something...It's such an awful waste, you never get it back...wasted time...” (p. 128)¹²⁾

と言い、若いときに失敗したドーバー海峡を泳いで渡る夢を持ち続け、何年も経った後に、成功する。彼女の生き方は次の事を示唆している。

人生を歩むことは、二度と還らない時間を使うことであり、その時間を何に使うのかが問題である。限りある時間を一つの夢を持ち続けて努力し続けることに使うならば、何時の日か夢を達成できる可能性を示唆している。

ベンジャミンは持って生まれた運命ゆえに、普通の人には当たり前のように与えられている多くのものを初めから諦めて生きることを余技なくされているのだが、その境遇の中でも努力を怠ることなく必死に生き、そして真剣に愛しながら生きていけば、いつかは夢を実現出来ることを暗示している。

IV-2-3 原作と映画の象徴技法の比較

以上の考察を踏まえて、「ベンジャミン・バトン数奇な人生」の原作と映画における象徴技法をまとめてみる。

原作では稀有な運命を背負わされたベンジャミン・バトンの日々の生活が淡々と語られているだけで、逆に回る時間の中を生きるという人生の根源的な主題についての象徴表現はなされておらず、読む人の心に強く響くものがないのである。そのため、原作を読む人は主題の核心に気づくこともなく読み過ごしてしまいがちである。

それに対して映画は、人生を支配する時間の存在というものを観客の意識下にクローズアップして、その本質を理解させることに成功している。観客は逆に回る時間を生きるベンジャミンが直面する数々の苦難と、その苦難を普通の時間を進む人にはわからない努力を持って

12) Ibid.,

克服していく姿を介して、人生の意義や幸せを掴む生き方の指針を学び取る。そこで用いられている象徴技法の効果は、観客が感動と共感を伴う感覚によって課題を容易に理解できるように作られている。

IV-2-4 映画にみる象徴技法の構造化

ここで注目すべきことは、映画における象徴技法は、ストーリーの展開に合わせて場面説明の為に挿入されているのではなく、観客に対して主題を効果的に理解させる意図を持って、構造的に組み立てて挿入されている点である。

この映画での象徴技法の構造化とは、以下の段階を全て象徴表現で行っていることである。

- (1) 記憶の呼び覚まし：前述したスperlベルの定義による『呼び覚ますべき記憶』が基礎となるため、多くの人の記憶に今も強く残っている出来事と結びつけ、その記憶を呼び覚ます手段を講じる。
- (2) 主題である「時間」の理解：物語の主題が何であるかを理解させることが重要であり、ここでは『時間というものの意味の理解』をさせることである。
- (3) 「人生を生きる意義」の理解：時間に支配された人生であろうとも、それを生きることには意義があることを理解させることである。
- (4) 試練の人生を生きる人間に必要な覚悟：意義ある生き方を獲得するためには困難が伴い、それを乗り越えるには相当の覚悟が必要とされることを理解させることである。
- (5) 希望の獲得：ハンディを背負って困難の中を生きる最大の力は未来への希望を獲得することである。
- (6) 希望実現の方法：苦難を乗り越え、意義ある生き方を獲得する方法論が提示されることである。

以上に述べた構造化の各ステップを、映画では具体例にどのように組み立てているかを検証する。

(1) 記憶の呼び覚まし

原作は1922年に発売されたものであり、時代背景が読者の記憶に薄い昔のものである。例えば戦争は原作ではスペイン戦争（1898年）であり、それを体験した人々はもはや生きていない。そのため映画では、アメリカ国民が総動員された戦争体験で最も新しい第二次世界大戦（1939～1945年、日本参戦は1941年～）に変更している。第二次世界大戦で戦死したアメリカの若者は多く、戦死した息子や兄弟を偲ぶ肉親もまだ多くが存命である。また、ハリケーンは、まだアメリカ南部に大きな傷跡が残るカトリーナ（2005年）を登場させて観客に生々しい記憶の呼び覚ましを図っている。

(2) 主題である「時間」の理解

この映画の主題を観客に理解してもらうには、まず「時間」というものの不思議さを理解してもらわなくてはならない。そのために取り入れた象徴が「逆転する時計」と「ハリケーン」である。前に詳述しているように、この二つの象徴から、観客は時間というものの不思議さを改めて考え直すきっかけを与えられる。

(3) 「人生を生きる意義」の理解

時間の概念を理解した上で次に求められるものは、人が生きるとはどういうことなのかという意識の誘導である。この誘導をスムーズに行うため映画では、前に詳述しているとおり七回もカミナリに打たれた老人を登場させ、人生において遭遇する試練は、そこから生きる価値を学ぶものであることを教示している。

(4) 試練の人生を生きる人間に必要な覚悟の理解

映画では、前述しているように、ピアノを習った老婦人の言葉を介して教示している。

(5) 希望の獲得

人とは違う人生という時間を生きようとする時、希望を持つことが生きる勇気と忍耐力を与えてくれるものである。その希望の象徴として「奇跡の鳥」ハチドリを登場させ、肉体は滅んでも魂としての永続性は継続されることを象徴している。

(6) 希望実現の方法

映画では、希望を持って生きる人間に、その希望を実現する方法が教示されている。

それは前述しているドーバー海峡を泳いで渡る女性の生き方である。

上述したように映画では、特定の意味を持つ象徴を、ストーリー展開の中に構造化して組み込んだことにより、人々が限られた時間を生きる上で自覚すべき重要な主題を解りやすく説いている。

その象徴技法によって、どんな運命の下に生きようとも、それぞれに価値ある生き方、幸福になれる生き方があり、努力を重ねて価値ある生き方を貫いた命には、命の有限性を超える魂の無限性の世界が待っていることを、観客は暗示される。

V なぜベンジャミンは自分の生への執着を乗り越えることができたのか

ベンジャミンは家族愛のためとは言え、なぜ自分の生を楽しむ欲望から解き放たれ、己を捨てるという悟りの境地に似た行動に出ることが出来たのだろうか。その謎を解くために、命の終焉が迫り来る中で人の精神が到達することのできる境地について、二つの事例から考察する。

一つは、エリック・エマニュエル・シュミット原作の「100歳の少年と12通の手紙」であ

る。

「僕は両親に、人生はおかしな贈り物だということを説明しようと思いました。最初、人はこの贈り物を必要以上にありがたがって、永遠の命を手にしたと思ひこむ。そのあと、こんどは必要以上に見下して、人生はバラ色じゃない、短すぎると思ひ、投げ出そうと思ひさす。でも、最後には、人生は贈り物じゃなくて借りものだということに気づく。

すると人生に恥じない生き方をしようとする。」(p. 104)¹³⁾

これは人生における時間というものが人にはどうすることもできない運命であることを表わすと同時に、その限られた時間に人間がどのように立ち向かうかによって、人生がネガティブなものになるか、ポジティブなものになるかが決められることを教えている。

ベンジャミンは自分に与えられた限られた時間を、愛する妻と娘のために生きることを決意することによって、自分の人生を恥じないもの、意味あるものにできると確信したのだと考えられる。

二つ目は小説ではなく実例である。

米アップル社の創立者で同社の CEO でもあった故スティーブン・ポール・ジョブズ (Steven Paul Jobs, 1955年2月24日 - 2011年10月5日) の人生と時間に関するスタンフォード大学2005年卒業式の祝辞を引用する。彼はその時既にすい臓がんにも冒されていることを知っていた。

When I was 17, I read a quote that went something like: “If you live each day as if it was your last, someday you’ll most certainly be right.” It made an impression on me, and since then, for the past 33 years, I have looked in the mirror every morning and asked myself: “If today were the last day of my life, would I want to do what I am about to do today?” And whenever the answer has been “No” for too many days in a row, I know I need to change something.

Remembering that I’ll be dead soon is the most important tool I’ve ever encountered to help me make the big choices in life. Because almost everything – all external expectations, all pride, all fear of embarrassment or failure – these things just fall away in the face

13) エリック・エマニュエル・シュミット著 阪田由美子訳 「100歳の少年と12通の手紙」 河出書房新社 2010

of death, leaving only what is truly important. Remembering that you are going to die is the best way I know to avoid the trap of thinking you have something to lose. You are already naked. There is no reason not to follow your heart.”¹⁴⁾

このスピーチの内容は、ベンジャミンが自分の死を予期した時、一番大切なもののために他の執着心を捨てることができた考え方に通じている。すなわち人間は自分の死を本気で意識した時、初めて富や名声への執着心から開放されて、裸の自分の心に従って生きられるようになることを示している。

上記の二つの例から、ベンジャミンが自分の死を覚悟したとき、彼の心の中で最も大切なもの、永遠性のあるものに自分を捧げる決心ができたことが、不自然なことではなかったのだと納得できる。それによってベンジャミンは自分の生への執着を乗り越えることができたのだと考える。

この教えは、多くの観客の心を悩ませている種々の煩惱は、死を前にした時には大きな問題にはならないことを教えている。

VI お わ り に

「ベンジャミン・バトン数奇な人生」の原作と映画を比較して解ったことは、原作で提示された「人生という時間を逆さに生きたら、そこにはどんな人生が出来上がり、そしてその中でどんな課題が明らかにされていくのだろうか？」という基本的な問題意識は、映画化された場合でも、最も重要な主題として残され、少しも変更されていないことである。

この奇抜な構想を思いつき、原作としてまとめることが出来たのはフィッツジェラルドの小説構想面での天才性の表れといえる。しかし残念なことに、この奇抜な着想での人生ストーリーを成り立たせることに腐心するあまり、このストーリーが持つ基本的な課題を十二分に認識し、読者に解り易く咀嚼して示せるところまで熟成することが出来なかったのである。

それにも関わらず、その着想の素晴らしさ故に、後に続く幾人かの映画監督や脚本家等が映画化を繰り返し試みた。しかしいずれも失敗してきた。なぜなら、提示されているテーマが哲学性に富む難解なものであるが故に、原作の映画化では興行映画としての成功がおぼつかないものだったからである。しかし、芸術性に溢れるテーマに魅せられた映画関係者の何としても映画化したいという執念が、過去の失敗を乗り越えて今回の成功をもたらした。

そして今回の映画の成功には多くの要素が挙げられるが、何にも増して主題を訴える象徴

14) スティーブ・ジョブズのスタンフォード大学でのスピーチ (原文)
<http://ruinote.blog118.fc2.com/blog-entry-25.html> (2011/11/6 アクセス)

技法の成功にあるといえる。更に言うなら、本映画の根源的な主題を構造化して象徴表現したことにより、難しい主題を誰にでも容易に理解できるものにしたばかりでなく、愛と感動のドラマを求めてくる観客の希望にも応えうる高い芸術的完成度を持つ映画に生まれ変えさせることができたからである。

人は、若き日には未来への強い希望や野心を抱くが、成長するにつれて現実に直面し夢は次々と打ち砕かれていく。そんな現実の中にいる人達に、この映画は、自分が生きることの意味を虚心に問い直せば、自分の人生を価値あるものにする方策があるのだということを強く教示している。

映画「ベンジャミン・バトン数奇な人生」が原作を超えて大ヒットし、数々の賞を獲得する映画になった理由は上述した点にあると考える。

Bibliography

- Alexander, Henry. *Reflections on Benjamin Button* Philosophy and Literature, (33:1), 2009 Apr. 2009, 1-17 (2009)
- Brucoli, Matthew J. and Duggan, M. Margaret. *Correspondence of F. Scott Fitzgerald* (Random House, 1980)
- Bryer, R. Jackson. *The Critical Reputation of F. Scott Fitzgerald* (Arcon Books, 1984)
- Curnutt, Kirk. *A Historical Guide TO F. Scott Fitzgerald* (Oxford, 2004)
- Eble, Kenneth. *F. Scott Fitzgerald* (Twayne Publishers, 1963)
- F. Scott Fitzgerald. *The Curious Case of Benjamin Button* (Scribner, 2007)
- F. Scott Fitzgerald. *The Great Gatsby* (New York: Charles Scribner's Sons, 1925).
- F. Scott Fitzgerald, Erich Roth, and Robin Swicord. *The Curious Case of Benjamin Button Story to Screenplay* (Scribner, 2008)
- Goldhurst, William. *F. Scott Fitzgerald and His Contemporaries* (The World Publishing Company, 1963)
- Hook, Andrew. *F. Scott Fitzgerald* (Palgrave, 2002)
- Le Vot, Andre. *F. Scott Fitzgerald* (Warner Books, 1983)
- Stanley, C. Linda. *The Foreign Critical Reputation Of F. Scott Fitzgerald* (Greenwood Press, 1980)
- Tyree, J. M. "Against the Clock: *Slumdog Millionaire* and *The Curious Case of Benjamin Button*." *Film Quarterly*. Berkeley: Summer 2009. Vol. 62 Iss. 4: pg. 34, 5pgs.
- Turnbull, Andrew. *The Letters of F. Scott Fitzgerald* (Scribner, 1963)
- 内田 樹著『映画の構造分析』扇文社 2011
- 加藤幹郎著『映画とは何か』みすず書房 2001
- 杉野健太郎著『映画とネイション』ミネルヴァ書房 2010
- 杉野健太郎著『映画の中の社会／社会の中の映画』ミネルヴァ書房 2011
- 坪井清彦著『破滅の影』あぼろん社 1976
- 永岡定夫, 坪井清彦著『完訳フィッツジェラルド伝』こびあん書房 1988

Summary

A Comparison of “*The Curious Case of Benjamin Button*” with its Film Version Focusing on Symbolism

Yuko Yamanaka

If we compare the original story with the film version, we can conclude that the theme of the original story of “If we reverse the time of our lives, what kind of life we create, and what subjects in it gradually become apparent”. This basic theme is also followed in the film version as a vital subject and without any changes.

This unbelievable plot thought out and composed into a story by Fitzgerald truly indicates the brilliance of the author. However, it is a pity that this story of life of an unbelievable idea and its basic theme were not fully appreciated and recognized by its readers.

Because of the very brilliance of the subject matter, many movie directors and scenario writers tried to make the story into a movie but, all failed mainly because the theme itself was highly philosophical and was difficult to make a successful movie based on the original story. Nevertheless, many in the movie industry believed in the brilliance of the theme and did not give up and finally created this successful film version overcoming the past failures.

The success of this movie is due to several factors and it can be said that the main one was the use of symbolic images for the basic theme. In addition, the symbolic images created resulted in a movie that can easily be understood by the audience even with the very difficult theme. It also left the audience to look forward to an emotional drama with a love story.

It also created a movie which was not only highly artistic but one that fulfilled the desires of the audience who were looking for a love story and an emotional drama.

All people, when they are young, look forward to the future with strong desires and full of ambition. But, as they grow up and face reality, their dreams are shattered from time to time. As a result, the majority of people who are faced with realities usually give up their dreams and begin to take a defeatism attitude towards life. To these people the movie gives a chance to take another look at their lives and suggests that they try again to improve their lives. Those who see the movie will not only be awed with the story but also be revived a new spirit to try again to charge their monotonous life.

It can be concluded that this is why the movie “*The Curious Case of Benjamin Button*” became such a big hit and received many awards way above the original story.